

大谷大学図書館蔵『小野六帖事』について——付翻刻——

佐藤 愛弓

はじめに

大谷大学図書館に所蔵される『小野六帖事』（余大937）は、真言宗小野流の口伝を集成したものであり、『小野六帖』についてだけでなく小野流の伝授に関わるいくつかの口伝が載せられている。伝本は他に、仁和寺所蔵『小野六帖事』（塔中蔵第十七函、第二七号）があるが、仁和寺所蔵本は紙や筆の状態から、鎌倉時代中期～末期のものと推測され、この書の成立から遠くない時期のものであると考えられる。この書の成立については、本奥書や年代を示す識語が一切無いため内容から推測する他はないが、後述するように本文の中で最も遅い時期の人物であると考えられる顕意が、興然の弟子とされ故人として記されていることから考えて鎌倉時代中期以降の成立と考えられる。また本書の成立した環境についても、本文中の「師云」の師が誰であるのか明記されていないこともあって不明な点も多いが、勧修寺慈尊院第二世、理明房興然（一一二一―一二〇三）の伝授に集約される口伝を多く含むことから、興然由来の伝授を受けた者の口伝集と考えられる。本稿では本書の紹介を行うとともに、鎌倉時代の真言宗の状況において口伝がどのような意味を持っていたのかを考えたい。

周知のとおり真言宗は師資相承の伝授をその宗教体系の中心としており、院政期以降分派を繰り返し、いくつもの流

派を成立させた。複雑化していく伝授の系譜の中で、流派の優劣を競うこともあり、伝授の正統性を主張しあうことも多くあった。そのような状況において、伝授の内容の差違や、伝授に至る事情を語る口伝は重視され、それ自体が伝えられるものとして整備されていったとみられる。本書に多くみられる「伝授にまつわる語り」という要素もそのような中で育まれていったものであろう。このような口伝は伝授の場にかかわる僧たちの葛藤を、極めて生々しく伝えるものであるといえる。本稿では大谷大学蔵『小野六帖事』の記事を紹介、分析することによって、相伝の場をめぐる語りの一端を示したい。

一 書 誌

本書は、内題の下の「五智山」（復郭朱印）の印記、および表紙右下に書かれた梵字の様子から考えて、元は五智山蓮花寺に所蔵されていたものと考えられる。五智山蓮花寺は元仁和寺の院家であったとみられ、現在は独立した寺家として仁和寺に隣接して存在する。ちなみに大谷大学には、他にもいくつか五智山蓮花寺の朱印、もしくは識語を持つ本が所蔵されている。なお大谷大学図書館本の外題には、『小野六帖事抄』とあるが、内題および仁和寺本に「小野六帖事」とあるため、本稿では、「小野六帖事」と呼ぶこととする。縦二〇・三糎、横一四・五糎からなる中本であり、袋綴装の写本である。紙の状態などから近世中期以降の写本であることが明白であるが、冊末には以下のような奥書がある。

（冊末）正徳三年癸巳秋九月廿五日六日、以池上忍賀阿闍梨本写之、沙門慧旭、手写

これによれば正徳三年（一七一三）の九月二十五日と翌二十六日に、沙門慧旭が池上阿闍梨忍賀の本を書写したことが知られる。本文同筆とみられ、これを書写奥書としてよいと考えられるが、この本を書写した慧旭については、不明である。蔵書印から五智山蓮花寺に旧蔵されていたとみられること、五智山蓮花寺が元仁和寺の院家であったとみられること、仁和寺所蔵の『小野六帖事』（塔中蔵第十七函、第二七号、鎌倉時代中期）と本文がほぼ一致することを総合すると、

本書は仁和寺本の忠実な写しであると考えられる。

二 本文の内容とその特徴

冒頭に述べたとおり本書は、真言宗小野流の伝授に関わる口伝を収集したものと考えられるが、そのほとんどが伝授の内容についてではなく、伝授の系譜とその背景にあった事情を記したものである。本章では伝授の事情という点を重視して各口伝の梗概を示すとともに、その記事の特徴と意義について述べていきたい。

(一) 小野六帖事

最初の項目は本書の標題ともなっている『小野六帖』の相伝についての口伝である。『小野六帖』は小野僧正仁海が編纂した聖教であり、範俊の代に白河院に献上され、院の宝蔵たる鳥羽宝蔵に納められたことで知られる。本書の中でも白河院への献上については、以下のように記されている。

件の書は、小野僧正仁海の作であり、仁海からその弟子成尊に、成尊からその弟子範俊へと受け継がれた。しかし範俊は弟子の門跡にはこれを伝えず、白河院に献上した。

ここまでの記述は、すでに知られている『範俊解』¹や『真言伝』²と同一である。またこの点については小野流が院権力と結びつく契機としてすでに諸氏の論じられているところである。³しかし以下の記事は他書にはみられない『小野六帖』の相伝系譜であり、管見のかぎりこの相伝について触れた論はない。

ある時鳥羽院が、信望の厚い近臣僧宗命に「この書は範俊が白河院に献上したものであるが、門跡には相伝されていないのか」とお聞きになった。宗命が「この書は門跡には一切伝わっておりません」と答えると、鳥羽院は「ならば一見せよ。しかし書写してはならない」とおっしゃった。その日の夕方に宗命はこの書をお借りして退出したが、一夜の間に一部六帖すべてを書写してしまった。翌朝院の使者がやってきて原本を召し取っていった。宗命は

書写した本を秘蔵して、一切披露しなかった。なぜこの書が流布することになったかという点と以下の様な事情による。宗命の叔父円忠は寛一の後、円樂寺を相伝していたが、ある時その相伝は誤りであるとされ、円樂寺は恵仁に領知されてしまった。そこで宗命は円忠を付属の弟子となし、この書の書写を許した。こうして円忠に書写された『小野六帖』はさらに長宗に伝わり書写されることとなった。また長宗が師の大法房実任にこの書を見せたことから実任もこの書を書写した。そのようにしてこの書は諸人が書写することとなり、次第に流布することとなったのである。頗る無念のことである。

以上の記事から知られる、『小野六帖』の伝来の系譜をまとめると以下のようなことになる。

仁海—成尊—範俊—白河院—鳥羽院

宗命—円忠—長宗—実任

これによれば実任書写の『小野六帖』はそれまでに、宗命—円忠—長宗と書承されたこととなる。興味深いのは、宗命がこれを書写した時の事情について、鳥羽院はあくまでも一見を許したのであって、書写もまして正式な伝授も許した訳ではないとする点である。宗命は醍醐理性院第三世にあたり、内大臣藤原宗能の子であった。藤原宗能は院の近臣であり、この記事からは宗命も院の信望の厚かった近臣僧であったことがわかる。『小野六帖』の流出は、鳥羽院の身近な所から、極めて私的な経緯ではまったといえよう。そしてその後の宗命から円忠、円忠から長宗、長宗から実任への書承も、いずれも私的な縁故を中心として展開されており、正式な伝授をとまなかったものではないとみられる。すなわちここに記されているのは書承の系譜であって、口伝の伝授をとまなかった正式な師資相承ではない。さらに注目されるのが、この口伝を残した者がこの事を「頗る残念な事だ」と述べている点である。ここからはこれを語った師がこのような流布のあり方を否定的に捉えていることがわかる。この口伝の主は、『小野六帖』の流布を残念なことに捉える立

場の人物であったと考えられる。

(二) 勸修寺無外題事

この一条も『小野六帖』についての師の口伝を記したものであるが、先ほどの理性院宗命を経由した流布とは異なり、勸修寺流における『小野六帖』について述べたものである。梗概を以下に記す。

師の口伝によれば、勸修寺流には二帖の書があるが、その二帖には外題が無いという。一帖は嚴覚が範俊から受けた口伝であり、もう一つは寛信が嚴覚から受けた口伝である。これは伝受外のものであり、秘書である。

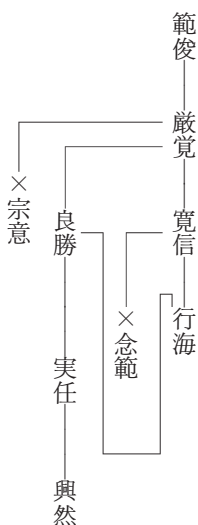
すなわち勸修寺流の伝える『小野六帖』には他にはない二帖があり、それは範俊から嚴覚への口伝と、嚴覚から寛信への口伝を記したものであり、秘書であるとする。ここには先ほどの流布とは別に、勸修寺流において範俊から嚴覚へ、嚴覚から寛信へ、口伝の伝授をとまった相伝が続けられていたことが記されている。そして口伝を記した二帖こそが貴重な秘書であると述べている。

(三) 秘密灌頂事

勸修寺流が重視する最極秘密灌頂についての口伝である。梗概を以下に記す。

師がおっしゃったことには、件の灌頂(秘密灌頂)は、(広沢流には無く)小野流のみに伝わるものであり、さらに醍醐流には伝わらず、かの流(勸修寺流)だけが伝えるものである。そもそも嚴覚が師の範俊から伝えられたものであるが、嚴覚は二人の弟子のうち寛信に相伝し、宗意には相伝しなかった。また嚴覚は、死の床に臥した時、側にいた良勝にこれを伝授した。その事情は以下のようなものであった。病の床に臥した嚴覚は、良勝に「汝は年来の弟子である。私の死に際して思う所があれば言うがよい」と尋ねた。すると良勝は悲泣して何も言わなかった。その時嚴覚は「あれは秘密灌頂を望んでいるのだ」と察し、病に苦しみながらも、秘密灌頂を良勝に授けた。

一方嚴覚にこの大事を授けられた寛信はじめ、誰にもこれを授けなかったが、不思議の事があって(伝授するこ



この口伝の話題の中心は、寛信から行海への伝授の際におきた不思議と、病床の厳覚が憐憫の情から良勝へと伝授をしたという顛末の二点である。ちなみに厳覚から良勝へなされたいささかイレギュラーな伝授については、勸修寺流内部で関心の高い話題であつたらしく、南北朝時代に慈尊院第六世栄海が編纂した『徹微羅抄』⁴にも記事がみられる。蓮光房良勝は藤原道長の子息であり、範俊、厳覚に師事した真言僧であつた。

56

(四) 理趣經事

大師請來の不空訳の理趣經について、実任由来の伝來を述べた一条である。梗概を以下に記す。

弘法大師が唐から請來した不空訳の理趣經は、実任の許に所藏されていた。実任は死に際して、弟子の長宗に命じて「この經は一宗の大事である。付属の弟子である善性房宗実に相伝したいが、まだ初心の人なので（おまえが預かっておいて）成人した後に必ず宗実に譲与してほしい。また（宗実に対して）総じてよく授法するように」と言った。長宗は実任の遺言に従ってこの經を宗実に授けた。その後その經を興然が乞い取って領収したのである。この記事からわかる大師請來『理趣經』の伝來系譜をまとめると以下ようになる。

実任——長宗——宗実——興然

なおこの一条も興然がこの經を領収したことを示して閉じられている点が注目される。

(五) 灌頂花水事

灌頂の時の花水を汲む時間について、小野流と広沢流の説の違いをまとめたものである。

(六) 小島灌頂事

小島灌頂について、師説を紹介する一条である。実任の説を述べたものであるが、事相の内容についての記述であるため梗概は略す。

(七) 大法房弟子事、四天王人

冒頭に「理澄房長宗、理明房興然、文泉房朗龍、兵部阿闍梨叡信」と列記されているとおり、四天王と称される実任の四人の弟子について述べたものである。以下に梗概を記す。

実任受法の弟子は数多くいたが、その中で伝授の器として選ばれたのが理明房興然であった。叡信、郎澄、長宗、興然は四天王とされたが、秘密灌頂の印信は興然一人が伝授を許された。また澄海、寛一、俊澄などもみな受法の

弟子である。このうち俊澄は閑所に簞居してその合間に受法したが、遂には宗の先達となった。

実任の弟子四天王を挙げ、またその他の受法弟子のことを記した一条である。ここでも興然は秘密灌頂の印信を授けられた最重要の弟子であったと記されている。

(八) 太元帥大事

真言密教にとって極めて重要な秘密の大法、太元帥法の相伝について述べた口伝である。梗概を以下に記す。

この法(太元帥法)は故律師顕意に随って相承したものである。(顕意の師である)故興然(は実任の折紙口伝によってこの法を受けたという。実任は増俊に随ってこの法を伝受したのである。相承次第は範俊、良雅、増俊、実任、興然、顕意となる。

また白河院の時、太元帥法の阿闍梨を求めて諸流にお尋ねがあったが、皆この法を相伝していないと申し上げた。しかし範俊だけが、この法を相承していることを奏聞し、良雅を挙げ申し上げた。よって良雅の法流をこの法の規模とする。

注目されるのは冒頭に、「(自分は)故律師顕意に随って太元帥法を相承した」と述べている点である。ここからはこの口伝の主が、顕意の縁者であったことを推測できようか。その上で興然が実任の折紙口伝によってこの法を相承したことを述べ、範俊―良雅―増俊―実任―興然―顕意と相承されてきたことを示している。この文脈からは自らが相伝した太元帥法の由緒として、その系譜を示していることがわかる。

また末尾には白河院が太元帥法の阿闍梨を求めているところ、他は誰もその法を相承していなかったが範俊一人がこの法を相承していたとする著名な逸話が記されているが、ここではこの法がいかに貴重な修法であったかを物語る逸話として示されたものとみられる。また良勝の流れを規範とするという文脈からは、自らが受けた相伝の正統性を語るものとしてこの口伝があったことを思わせる。冒頭の鳥羽院の記事とともに、真言の伝授が院権力と深く関わっていた事

を示す記事である。

おわりに

以上、大谷大学図書館蔵『小野六帖事』の書誌と内容を確認してきた。全体に興然を経由する相伝の話が多く、また他流の相伝に対する差別化の意識もみられる。このような記事からは、本書の成立に興然の伝授に連なる人の関与があったことが推測できる。

またこれらの記事からうかがえるのは、自らが伝受した聖教や修法の由来を記すことによって、自らの相伝の正統性を保証しようとする姿勢である。そしてそれは伝授の場において、相承される事柄とともに語られ記録されるものとなっていく、遂にはそのような口伝自体が相承の対象となっていくものと思われる。そのような伝授の場を契機として、口伝は幾重にも相伝を取り囲み、それを秘しながら守っていた。それは流派の分派した中世の実態にあつては極めて重要な行為であつたと考えられる。

また院政期以降真言宗は、白河院、鳥羽院といった院権力との交渉を多く持っていくが、本書のような口伝においてはそのような院権力と真言僧との交渉が、話題にされることも多い。そのような記事を分析することは、院という存在が真言密教界にどのような影響、ひずみをもたらしていたのか、またそのことを真言僧がどのように受け止めていたのかを知ることにつながる。本書はその断片にすぎないが、口伝の分析のもとらす成果は少なくないと考えられる。

〔翻刻〕

凡 例

一、底本は大谷大学図書館蔵、「小野六帖事」(餘大937)とする。

一、仁和寺所蔵「小野六帖事」（塔中蔵第十七函、第二七号）の表記を注で示した。但し見返目次は仁和寺本になし。

一、旧漢字、異体字は通用の字体に改めた。

一、読点を私に付した。

一、合字は原本のまま示したが、括弧内に開いた表記を傍記した。

一、行取りは原本のままとし、改頁は」（第〇丁オ・ウ）で示した。

一、訓点、振り仮名、細注などについては、できるだけ原本どおりに示した。

（外題）小野六帖事抄 全

（見返目次）

小野六帖事 勸修寺無外題事

秘密（通頂）湏事 瑜祇經事

湏（通頂）花水事 小島灌頂事

大法房弟子事四天王人 太元帥法事

已上慧旭私列之

（本文）

小野六帖事

師云、件抄者小野僧正之作也、僧正伝成尊僧

都、々々伝範俊僧正、々々之時不伝門跡□進入白⁵

河院了、而鳥羽院御時、宗命僧都殊被特思□⁶

之間、或時令取出件抄御^{シテ}被仰云、是書者
範俊令進白河院了、若門跡ニ令相伝乎如何、
宗命申云、此抄門跡ニ一切不伝候^{云々}、重被^ル

(第二丁オ)

仰云、然者可令一見、不可令書写^{云々}、今夕給
預退出之後、一夜之間一部六帖悉令書写

了、次朝以御使被召取了、僧都秘藏^{シテ}敢
不被披露、而件抄流布事ハ、円樂寺ハ寛一

之後、円忠^{大臣殿}アサリ、宗命ノヲチ令相伝、然而其儀依違^{ヲテ}了之、
惠仁^{任イ}令領知之間、僧都以彼阿闍梨為付属

(第二丁ウ)

之弟子、仍件抄令許書了、而長宗^{上野ア}サリハ自^ル
寛一之時、為彼闍梨之苛責、依之以件抄令

見彼長宗之処、以年来之芳意依令懇望
愍令許書歟、長宗依為受法之師令見大

法房之間、大法房不堪專重令書写了、其後

以大法房之本諸人書之、次第流布、⁸□于今者人
別持之、頗以無念事歟^{云々}、

勸修寺無外題事^ル

(第二丁オ)

師云、彼流ニハ有二帖ノ書、云無外題^ト、一帖ハ敝
覺受于範俊之口伝也、一帖ハ寛信受于

嚴覺之口伝也、伝受□⁹之外也、秘書也^{云々}、
秘密^(無頭)湏事

師云、件^(無頭)湏者、只小野之一流ニ有之、酉酉^(無頭)ニハ無
之、彼流ニ所伝^(秘傳)禾^ハ湏者^{云々}、小野之様頗以
異事也、勸修寺ニハ専伝之、嚴覺僧都者範^ル

(第二丁ウ)

俊受之、而嚴覺二人弟子寛信宗意也、寛

信ニハ授之、宗意ニハ不授之、嚴覺臥病席頗及

危急之間、僧都示良勝蓮光房云、汝已年

来之弟子也、吾命待時、若有思事者可示^{云々}、

良勝悲泣不言、于時法務被諷諫云、アレハ

定テ彼大事ヲコソ懇望^{云々}^{之歟}¹⁰志深^ヲ以^テ也^{ト云々}¹¹

於是僧都乍沈病患ニ、忽ニ書印信被授彼^ル

(第三丁オ)

大事ヲ畢、依為宗之大事如此最後授来

事也、法務ハ此事遂不被授于人、但有不思議ノ

事、行海与念範同壇シテ受伝法灌頂於法

務之刻ニ、法務思ハスシテ件ノ大事ノ印明ヲ授畢、

而翌日ニ呼行海ヲ、問云、夜前ノ事ハ覺乎如何、

行海答云、覺慥シカ^{ト云々}也、法務有奇異

之氣深被隨喜、次呼念範又被問之、不覺悟^{云々}、^ル

(第三丁ウ)

一期之大事、輒癡忘之条、不及沙汰事也^{云々}、
行海寄法務之気色、行向良勝闍梨之許、求
請此事之処、殊ニ有許容¹²悦¹³テ令授之ヲ、印
明如先是宿縁令然歟、不可説々々々、故大法
房ハ從良縁房受之¹⁴、其後從大法房ニ人々多
受之¹⁵、□被放印信之事者唯理明房一人也^{云々}、
瑜祇経事^ル

(第四丁オ)

大師御請来経ハ不空訳歟、故大法房之許ニ
件経アリケリ、大法房最後冥目之時、命長
宗闍梨云、此経者一宗之大事也、直雖付属
善性房^{宗実}當時已初心之人也、件人成人
之後必可讓給之、惣能々可令授法^{云々}、長
宗闍梨如大法房之遺言、以此経被伝善性
房了、而件経理明房被乞取了、其経ハ百八名¹⁶
讚無之、是正大師御請来之本藏経也^{云々}、
尋云、此事殊勝也、但大師御請来之経軌ハ、
東寺三十帖策子是也、而件策子目錄ニ瑜
祇経金剛智訳^{云々}、此条如何、答此事実
難思也、猶々可尋事歟^{云々}、

(第四丁ウ)

(灌頂)
湏花水事

花水汲事、小野広沢両説相違也、小野方ニハ^レ

(第五丁オ)

寅時汲之^{作法有之}、本説有之、広沢ニハ丑時汲

之、以丑時水名花水事、外書之中本説有之^{云々}、

小嶋灌頂事

師云、小嶋、^(灌頂)者、修金剛界一壇授两部也、

以破地獄儀軌為本書以第九印為秘奥事^{云々}、

又授三身印是則彼流也、大法房説、

或師云、加持香水之時、以五古当額觀念スル事^レ

(第五丁ウ)

アリ是ハ彼^ハ一山ヲ觀スル也、彼所ニハ五山^{サシ}ト云名アリ、

五ノ山ノアル也、似五古形ニ中央ノ山彼^ハヲハ埋給ヘリ、

五山^ヲ廻テ河アリ、件五古ヲハ彼ノ五山ト觀之¹⁷、件河ヲハ

此香水ト觀シテ、五古上ニ^ハ朱アリト觀シテ誦¹⁸

宝生尊ノ真言奉加持也^{云々}、

大法房弟子事 四天王人

理澄房長宗、理明房興然、文泉房朗龍、^レ

(第六丁オ)

兵部阿闍梨叡信、件受法次目、^{音散19}雖有其

数に以理明房殊為宗也、叡信、朗澄、長宗、此等者彼四天王也、叡信ハ狹深也、興然ハ広浅也、秘密灌頂印信ヲハ興然一人令放与之、故西院御房モ令受法給、但依持明抄事

令違背給了、澄海、寛一、俊澄等皆彼受法弟子也、此中俊澄者依為浅貧不受彼輩、閑

所ニ籠居シテ伺其隙々受法、然而遂宗ノ先達

了、貧而著業尤有其持歟云々

大元法大事

此法者随故律師顯意替秘ハ灌頂所相

承也、故理明房所受大法房之折紙口

伝也、大法房□為授理明房、随増俊阿

闍梨伝受此法云々、相承次第範俊 良雅

増俊 実任 興然 顕意、

白河院御宇、太元阿闍梨其欠出来、此法事

被尋諸流之处、各皆不相伝之由、令申之間、

範俊僧正相承之由、所奏聞也、即被举事良

雅、仍於此法者以良雅之流所為規模也、大法

房随大乘院所受二ヶ秘印者、釵輪印怒

(第六丁ウ)

(第七丁オ)

使印也、二印中釵輪為勝^{云々}、彼印有八方、^ル（第七丁ウ）

以印ノ八方ヲ宛輪ノ八幅ニ²⁵也、自其ノ八幅出生八

輪令放八方、撰領八方摧破怨家守護其²⁷

方也^{云々}、

式部僧都寛^云云、修太元法引七重幔者

是結彼印之時、為不令見也、印相威儀極

見苦故也^{云々}

（第八丁オ）

正徳三年癸巳秋九月廿五日六日、以池上忍賀阿

闍梨本写之了

沙門慧旭

手書^ル

（第八丁ウ）

註

1 秋宗康子「鳥羽僧正範俊解」（『史料』四三卷四号、1960年）

2 『対校真言伝』卷六卷範俊伝（説話研究会編、勉誠社、1988年）

3 秋宗康子前掲論文、竹居明男「鳥羽勝光院の経蔵（宝蔵）」（『日本古代仏教の文化史』吉川弘文館、1998年）、上川通夫「文

書様式の聖教について―杲宝筆範俊解―」（『東寺文書研究会編『東寺文書にみる中世社会』東京堂出版、1999年）のちに『日

本中世仏教史料論』吉川弘文館、2008年に所収）、上島亨「随心院と随流の確立」（『仁海 仁海僧正御生誕一〇五〇年記念』

真言宗善通寺派大本山随心院、2005年）

4 『儼微羅抄』（『大日本仏教全書』第522巻、仏書刊行会、1914年）

- 5 仁和寺本に「被」の文字あり。底本にはなし。
- 6 仁和寺本に「食」の文字あり。底本にはなし。
- 7 底本に「之了」とある所、仁和寺本に「シテ」とあり。
- 8 仁和寺本に「於」の文字あり。底本にはなし。
- 9 仁和寺本に「集」の文字あり。底本にはなし。
- 10 仁和寺本に「之」とあり。
- 11 底本に「深ヲ以テ也^{ト云々}」とある所、仁和寺本に「深ク候^{ラメト云々}」とあり。
- 12 仁和寺本に「有リ」とあり。
- 13 仁和寺本に「令ム」とあり。
- 14 仁和寺本に「房」の文字なし。
- 15 仁和寺本に「但」の文字あり。底本にはなし。
- 16 底本に「藏經也^{云々}」とある所、仁和寺本に「秘經藏之□也^{云々}」とあり。
- 17 仁和寺本に「シ」とあり。
- 18 仁和寺本に「比ノ」とあり。
- 19 仁和寺本に「資」とあり。
- 20 仁和寺本に「器」とあり。
- 21 仁和寺本に「箆居テ」とあり。
- 22 仁和寺本に「隙々一」とあり。
- 23 仁和寺本に「者」とあり。底本にはなし。
- 24 底本に「挙事」とある所、仁和寺本に「挙申」とあり。
- 25 仁和寺本に「花」とあり。
- 26 仁和寺本に返点なし。
- 27 仁和寺本に「ノ」の文字なし。